
イーター・デリーター?

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーター・デリーター？

【Zコード】

Z5841Z

【作者名】

零夜

【あらすじ】

イザエルは、渓谷でデリートをおえた後、テントに身を隠していた。

そんな中一人、これから始まる。何かに、不安を抱きながら、寝袋に入る。

プロローグ（前書き）

あの後、見捨てられたイザエルは、敵をデリートし終え。

一人テントの中、これから始まる事を感知していた。

「いつたい何が起ころん？ 何がここまで嫌な予感をさせる？

俺を駆り立てる。踏み入れたらおわりのような、この不安は、？」

プロローグ

あれから俺は、渓谷で、

何億と言つイーターをテリートしていた。

本部に見捨てられた俺は、フィレイナを助けるために。

強くなりつつあつた。

だがそんな時、俺は、嫌な予感がした。

これから新たに始まる戦いがどんなに残酷で卑劣で、そこに踏み入れたら、もう・一度と戻れない様な。そんな感じをテントの中で一人思う。

「いつたい・・なにが起ころんだ。何がここまで嫌な予感をさせる?

俺を駆り立てる不安は、何だ?」

そんな事を思いながら寝袋に入る。

プロローグ（後書き）

イーター・デリー・ターーと書いた物語を一期目書き始めました。

どこにいても話が思いつきまくりで、「そうだ！！メモを残しておこう」と思つても、メモ用紙では足りません。（いやマジで）なのでノートに残すことにしたのですが足りるかな？最後に予告、

イザエルは、朝を迎えていた。

そして、新たな敵により。

世界が崩れしていく。

では、ではノ

新たなる敵・・サウンドハウトロール（前書き）

明るい日が差し込む朝をイザエルは、迎えていた。

だが、外は、明るくても不安は、晴れることを知らない。

そして、また来たデリーター。そんな中。不安定な超音波のような音を聞き。

その音で頭を抑えてもがく。そこに一人の女性と。あいつが来る。

新たなる敵・サウンドハウトロール

「んっ？ 朝か……いい朝だな。空も晴れてるし。そつおもわねえか？ イーターに言つても無駄だな……さあ。来い。俺が最高の目覚めをプレゼントフヨーノーしてやるぜ！」

イザエルは、敵に囲まれていた。

「一体目！ ……デリート！ ……！」

一体目はこちらに気づいていないようだったので、後ろから刃を刺すことができたが。しかしそれが長く続くはずもなく。二体目、三体目と、次第に苦しくなる。

「ここのが私の新しい場所か？」

と本部に来た新しい仲間を受け入れる。者がいた。

デイレーン。

「そうだ。君があの有名な音楽家。ネイル フェガラ リバイルだな？」

「リバイルでいい。本名で呼ばれるのは嫌いだ。私も。デイレーンと呼ばせてもらつ」

「例のものは？」

「もうできる。」

「いいだらうついて來い」

私は、おくの部屋に通される。

私の持ち場となるのだろうか……

まあいい、どうせこやつらには、消えてもらつ

と思いながら。リバイルは、部屋に通される。

「ここか？」

「そのとおり。君の持ち場だ。」

「えらうそりんな態度をとるんだな？」

「そりゃ、俺は、ここで一番偉いからな . . .」

「そんな口を聞く割に役に立たなかつたら。お前を殺すぞ？」

「心得ておくよ。

よろしくな？」

「余計な指図は、するな。私は、お前を仲間と認めては、いない」

「貴様 . . . いい加減に」

「さつさと消える。」

「ここは、引くしかないのだろう。」

「やつと消えたか。さて、作業に移る」

俺に銃が向けられる。

「ちつ . . . 数が多い。ダイヤモー！解禁」

俺は、ダイヤモンドの力を解放し。

イーター達を切りに向かう。

目の前に三体並んでいる敵がいたが。

剣のサイズを調整。

三人同時にさせぬくらいにして、三体を軽く片付ける。

「さてと . . . コントロール開始。サウンドコントロール

私は、スイッチをONにする。

人の人体を侵し。イーターではなく。ユヒューマンイーター（人と似ているが限りなく人離れしているイーター）にする音を外に流す。

「ああああ . . . うつ . . .」

空に不協和音が鳴り響く。サブリミナス効果の強い危険な音だ。

なんだ？この音、動けない？前が見えない。

俺を発狂に追い込むようなその音は、耳の鼓膜をぶち抜けるほどの大

不協和音 . . .

「アアアアアーーーくそつ・・なんだこれは、まるで悲鳴のよつなもの
を録音し。

紐かなにかで縛られながら。悲鳴を高音で聞かされるこの音は、?
痛い、耳が痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
誰か！！

「なに？苦戦中か？情けないな？」

「その声は、？」

「よつ。お、おい大丈夫か？」

頭の痛みにもがき苦しむ俺の前には、
あの俺のエメラル「ピー」を割つた。
ブラックダイヤの全身を黒で統一している。

服装のまま。ブランデルがいた。

「おい、貴様ら。何をしている。サウンドコントロールだ早く逃げ
るぞーー！」

私について來い

ピンクと言つよりは、桃色に近い髪型の

軍人のような言葉使いをする女兵士と言つていいほど。
綺麗な女が立つていた。

「サウンド・コント・ロール？」

「話は、後だ今は、私を信じ共に來いーー！」

手が差し出される。俺は、この女がどんな女でどんな性格かは、知
らないが。

今は、「共に行こうーーー」と言つたその言葉が魔法のよつに感じ。
俺は、手を握る。・・・と同時に。桃色の髪をひらひらさせながら。
その女の足は、速く「絶対に手を離すものかーー」と言わんばかり
に桃色の光は、

イーターの集まる。終わらない廊下のよつな道を。ドアを探すかの
ように走り抜けていた。

新たなる敵・・サウンドハウトロール（後書き）

突然の音に。

突然の仲間、

これは、抱いていた不安が具現化したものだ。

突然の出来事にイザエルは、気を失いそうになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5841z/>

イーターデリーター？

2011年12月19日17時57分発行